



平成12年 3 月
第 32 号

発集発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-4
真言宗 正観寺
小 出 真 行

仏道遠からず

廻心すなわち是れなり

(一切経開題)

“救い” 永橋越(原図)

勝手に生んだ？

：こっちから生んでくれと頼んだわけじゃない

どう言い返そうか？

こんなこと言われたとき。

生みたくて生んだのは勝手かもしれないけれど

生まれてきた以上、あなたの代わりにあなたの人生を

生きてくれる人はいない

あなたは、ほんとうに勝手に生まれさせられたのかどうか、

その答えを出すのはあなたしかいませんよ。

そうなんです。この世に縁あって生を受け、機械ならば即部品交換でいいかもしれませんが、あなたとしての次のチャンスはないのです。心の鏡をみがきましょう。

年を取る

「気がついたらおじいさん、おばあさん」
人間は誰でも、いきなり年を取るわけではないのに、ある時、ある瞬間、年を取っている自分に気がついて愕然とする時がありませんか？
誰でも一秒、一分、一時間、一日ごとに年をとりつつあるのですが、しかし、それはほんの少しずつなので、自分では気が付かないのが普通です。

それでもある時、鏡に写った自分の顔を何気なく見るとか、急に食が細くなったとか、階段を上る時に息切れがする自分に気が付いて「ああ、年を取ったなあ。」と自分を振り返ることがありませんか。そして、過ぎ去った時間というものに思いを馳せるのです。

浦島太郎の物語は、現代から未来へ進んでゆくお話ではなく、現代から過去へ遡るお話として考えてみると、竜宮城は、とうに過ぎ去った自分の樂しかりし少年時代で、玉手箱は、ある時ふと自分の姿を見たときの鏡であり、白い煙は消え去った夢、浦島太郎を竜宮に運んだ亀は、我々を乗せて過ぎ去って行く時間そのもの…。このように考えれば、浦島太郎は、玉手箱を開けたところから逆に、遠い昔に帰る(思い出す)お話だというふうにも考えられますね。

中国の故事に「邯鄲の夢」の話ですが、廬生という男が邯鄲という都で、ある道士から、榮華が意のままになるという枕を借りて寝たところ、次第に立身し富貴を極める一生を送ったが、目覚めてみると、それはほんの短い一瞬の夢の中の出来事であった、というお話です。

それは人の世の栄枯盛衰のはかなさという言葉として使われますが、短い夢を見ていた間の物理的な時間と、夢の中で過ごした一生という時間と、どちらが現実のようであったかは、夢を見た廬生本人しか分からないのです。

自分の生きている時間というものをどの様に捉えていくか重要な事なのです。「夢さめてまた夢を見て」といったような、夢からさめたところ、また夢の続き…。なんてことは、この世に結構ある様に思えますが、いかがでしょうか。私たちの心に感じられる時間をもっと考えてみる必要があります。

「花まつり」

四月八日は仏教の開祖、お釈迦さまの誕生を祝う「花まつり」の否です。

今から二五〇〇年余り前、インドの(今のネパール)ヒマラヤのふもと、カピラ城というお城近くの、ルンビニーの花園でお釈迦さまはお



生まれになりました。天も大変によるこんで、その時、甘露の雨が釈迦さまに降りそそいだといえます。ですから、それにちなんで「花まつり」では、誕生仏にみんなで甘茶をかけるのです。

「花まつり」では、白い象をつくって子供達が引いたりしますが、これはお釈迦さまのお母さんのマヤー夫人が白い象が胎内に入る夢をみて、お釈迦さまをみごもったという、言い伝えにもとづいているのです。当時その白い象の夢は尊い方が生まれるしと信じられていました。

生まれたばかりのお釈迦さまは、すぐに七歩歩かれ、右手で天をさし、左手で地をさして「天上天下唯我独尊」、この宇宙の中で唯だ我れ独り尊い、と声高らかに宣言されたと言います。これはもちろん「この世の中で自分だけが唯独りえらいんだ」ということではないのです。「人間として大いなる自覚、大いなる悟りにおいて我れよりまさる聖者なし」ということ、そして「この上ない最尊、最上の道は誰の前にも、平等に開かれてある」ということをしめされたものなのです。人間は誰しもかけがえのない命を生かされていることに気付き、感謝の心と慈しみの満ちた生活を送りたいものですね。

ところで、お釈迦さまが生まれてすぐに七歩歩かれたというのは象徴的です。「七」は「六」より一つ多いということは…。つまり迷いの世界をぐるぐるめぐって六道輪廻の私たちの世界をすでに一歩越えられたということを、その生

まれにさかのぼり、誕生に託して示されたわけなのです。たった一步ですが、何事もその一步を踏み出すのがとても難しいですね。



筍

竹かんむりに、上旬、中旬、下旬の旬という字を書いて筍と読みますが、本当にあつという間に伸びて行く成長ぶりには実際驚かされます。子供たちの成長ぶりも同じようで、ついこの間生まれたばかりと置いていたのに、私の長男も四月から大学生、親の背丈を抜いてしまいました。

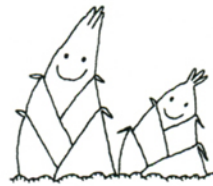
昔、中国に孟宗もうそうという親孝行な人がいて、寒い寒い冬の最中に、筍を食べたいという母のために、とうとう筍を掘りあてたという話があります。孟宗竹というのはそこから名付けられたもので、母のために誠心を尽くした孟宗に、天も感じたのであろうといわれています。

恩を知るといことは、人生にとって極めて大切なことですが、何か古くさい、価値のないもののように考えている人もいます。淋しい心ですね。家庭でも学校でも社会でも、

いろいろあつてはならない問題や事件をひきおこすのは、そうした淋しい心の持ち主が多いのではないのでしょうか。ただ独りでは生きてゆけない自分を思う時、四方八方から恵まれるものに、人間社会を含む大自然、有難いと思わないわけにはいきません。

筍は丈が伸びれば、成長したといいますが、私達人間は、ただ単に背丈が伸びただけでは、本当の成長にはなりません。一皮脱ぐたびに、心の方もあわせて成長させたいものです。

観光



観光とは観音様の「観」、観るという字に光と書きます。ですから光を感じるのが観光なのです。ですから観光旅行とはその土地土地の景色、風俗の発する光を感じられる度が本当の意味するところでしょう。ご馳走三昧とかお土産の買い物ツアーで、とどのつまりが「疲れたなあ」では観光旅行とは言えません。

旅の中でいろいろ出会う人、山川草木みな光を発しているのですから、その光を感じる旅が本当の観光旅行なのでしょうね。そして自分自身もつと光輝く人になってもらいたいもので

す。

仏教で「山川草木、悉有仏性」と言いますが、これは、山、川、草、木どれもことごとく仏性を有しているのだ、この世の中のもの全て、生きとし生けるもの“全て仏性、即ち仏の性質があるということ”です。光を放っているということ、逆に言えば仏の性質とは世の中の全てのものにある、と言うことになります。もちろん私達もみな持っているのです。みな、光輝いているということでしょう。

ただ、光は誰でもいつでも見えるというものではありません。太陽の光、月、星の光はこの目で認めることは出来ませんが、この仏性という光を感じるのは、つまり心の目なのです。

満月の光は静かな水面には、満月として映りますが、ざわついた水面にはそのままには映りません。その様に私達の心が澄みわたった時に初めて見える光があるのです。

真言宗の開祖、弘法大師が書かれた書物に「阿国大瀧獄にのほりよじ、土州室戸崎に勤念す。谷響きを惜しまず、明星来影す」とあり、お大師さまが青年の頃、その当時人も行ったことがないような、四国徳島の大瀧ヶ岳、室戸岬で修行され、山に向かい海に向かい心澄ますと、宇宙と自分が一つとなり、山の音が聞こえ、明けの明星が私の中に入り、正しく心が澄み、宇宙との一体化、この世に生きとし生けるものの光が感じられたと書かれています。きっとその時全てのものが光輝き、仏さまの世界を実感さ

れたのでしよう。
私達凡夫には、到達できそうにもない境地。
体験ですが少しでも、心の目を開いて感じみた
いものです。

”台風再来“

昨年九月二十四日、午前十時十分頃、台風十
八号が広島を直撃し、正観寺では、本堂正面の
引違いガラス戸、屋根の一部を破損しましたが、
年末までには復旧工事も完了しました。
尚、境内にありました「桜」の木も、その時
倒れましたので、三種類の念珠(腕輪、片手、
本)を作ってみました。「念珠」としては珍しい
桜材です。

坂東観音霊場巡拝(後期)

日時 平成12年5月15日～
5月20日(5泊6日)
会費 130,000円
定員 15名

腕輪念珠	1,000円
片手念珠	2,500円
本念珠	5,000円

平成十二年度 年間行事予定

三月	十二日(日)	観音大祭
三月	二十日(月)	彼岸中日
四月	二十日(木)	小豆島八十八ヶ所巡拝
五月	二十二日(土)	
五月	十五日(月)	坂東三十三観音巡礼
五月	二十日(土)	
七月	三日(月)	石鎚山参拝
七月	四日(火)	施餓鬼供養
八月	十五日(火)	地藏祭り
八月	二十日(日)	彼岸中日
九月	二十三日(土)	
十二月	三十一日(日)	年越し祭

御案内

小豆島八十八ヶ所巡拝
期日 平成十二年四月 二十日(木)
四月二十二日(土)
二泊三日
会費 四〇、〇〇〇円

墓地有

一㎡ 八十万円より
※他宗派の方も可